

午前五時、夢

☆ shiroa ☆

奇妙な夢から目が醒めると、時計は午前五時を指していた——

夢の中でモテるようになる男が体験する、欲望と恐怖が絡むほんわかスリラーです。

午前五時ノ夢

綺麗な人だった。頬笑みを交わしあうと昔から知っていた親しい友達のように近づき、僕は彼女の手をとった。細い骨を感じる、儂い弱い力のない手だった。二言三言言葉を交わすと、彼女は「じゃあね」と言った。僕は心の中でまた会えるかな、と思った――。

目が覚めた。時計を見ると午前五時十分。まだ起床までは時間がある。もう少し寝よう。そして再び僕は眠りにつく。浅い眠りだ。

『押絵と旅する男』という小説を読んだ時、僕は衝撃を受けた。その作品の中には確かにこう書いてあるのだ。夢は白黒と決まっている、と。作者の江戸川乱歩は数々の怪奇な小説を書いていることで知られている。その想像力たくましい作家は、恐らく白黒の夢しかみたことがないのだろう。だから、決めつけるように “夢は白黒” と書ききっているのだ。

会社の友人に話したことがある。「いや、夢って白黒でしょ。夢なんだから」。どうも友人も白黒の夢しかみたことが無いらしい。私は違う。子供の頃からずっとフルカラーだった。白黒の夢、というのをみたことが無い。そればかりか、現実的な感触すら感じることもある。だから、『エルム街の悪夢』という古いホラー映画を学生時代友達と一緒にみた時、人一倍怖がっていたのかもしれない。夢の中で怪我をし、朝目を覚ますと同じ場所に怪我をしている。ともすれば私の身に本当にそんなことが起きるのではないかと震えたのだ。幸い、夢の中で怪我をしても、たとえ死んだとしても、現実を持ってくることは今のところない。

いつもみている夢がリアルであるということはない。たいていはボワンと不確かな意識の中で矛盾した筋のストーリーが紡がれていく。物語は破綻しているがそれすらも気にならない。ただ、楽しいか、嫌な気分か、面白いか。感情が軽く動く程度だ。

しかし時折、驚くほど鮮明な夢をみる。五感が感じられるほどの夢だ。そう、不思議なのだが、五感、である。味覚を感じるし、触覚もある。聴覚も鋭敏に働き、空間すら感じとれる。唯一あいまいにぼやけているのは嗅覚だけだろうか。臭いだけはそう鮮明に感じとった夢はあまり記憶にない。

プールで泳ぐ夢をみたことがある。それはそう、小学生の頃だ。学校のプールを昼間泳いでいる夢だ。夏の暑い日差しが水面の上に見える、口の中には水が入ってくる。声援が聞こえる。ああ、応援されているのか。クラス対抗の水泳大会なのだろうか。僕は必死でクロールをしている。まるっきり、プールで泳いでいるのと変わらない感覚だった。

これは、夢のはずだ。

そう意識した瞬間に、その夢は終わった。起きて時計をみると時計はまだ夜の十一時前だった。ああ、そうだ。早く寝ようと布団に入ったんだ。

思えば五感を感じるような鮮明な夢をみたのはその時が初めてだったのかもしれない。

女の子がこたつに入っている。中学生くらいだろうか。小柄な女の子だ。場所は僕の実家。なぜこんなところに知らない女の子がいるのだろうか？ でもこれは夢だと分かっていたのでそう深く考えなかった。彼女は僕ににこりと笑いかけた。僕は彼女の隣に座り、一緒にこたつに入る。なぜか親密な気持ちになり、彼女の肩に腕をまわした。彼女は僕に寄りかかる。髪の毛が僕の頬に触れる。細くなめらかな髪の毛の感触が頬にこそばゆかった。

目が覚めた。時計をみると午前五時三分だった。またか、と思う。もう何度目だろうか？ いつからだろう。決まって午前五時ごろの夢だ。

普通の夢を観ているのだ。なんとなくボワンとした夢。気楽な夢をみていると、急に背景が変わる。変わる、といっても絵的に変わるわけではなく、現実的な空気が流れ始める感覚だ。耳も研ぎ澄まされ、緊張感も張りつめてくる。そこに女の子が現れる。でもその女の子はいつも違う女の子、しかも知らない子なのだ。若い女性ばかりだけれど、今回のように中学生くらいの女の子の時もある。多くは二十代か。

私生活では奥手の僕だから、女の子とこうやって近づけるといのは、たとえ夢の中でも嬉しいと思う。基本的には好意的に迎えてくれて、近づいても「嫌だ」といって突き放されることもない。そういうシチュエーションのなか、現実的な、五感を感じる夢というのはなんとなく得している気分にもなる。

けど、一抹の不安もある。

夢は夢。だけど、どうして急に五感を感じるような鮮明な夢になるのか？ 女の子が登場するのか。知らない子だと思っているだけで、実はどこかで会ったことがあるのか？ 自分が忘れていて、本当は脳の奥底に記憶されている人なのだろうか？ 分からないし、夢の話だ、証明できない。

会社の同僚に僕の夢の話をしたことがある。ちょっと不思議な体験をテーマにした話題のときだ。友人の男は僕のことを「うらやましい」といった。傍にいた女性は「それってもてない男の願望が夢になって出てきてるだけっしょ」といってからかった。

うん、まあ。多分そうだ。それが正解だ。これはきっと僕の願望だ。

ならいっそのこと、その夢を思いっきり楽しんでしまえばいいんじゃないか？

そう思ってから、僕はこの夢が楽しみになった。時々訪れる、至福の夢。二三ヶ月に一度だろうか。それくらいの頻度だけど、その時が訪れたら思いっきり楽しめばいい。

きゅっと胸が締め付けられる感じがした。そして現実的な空気が周りに広がっていく。あ、来たんだと思った。

スキー場、ホテルの一階、隣にゲームコーナーがあり電子音が聞えてくる。オレンジ色のラン

プの下、奥は喫茶店になっているのか、その店の前に髪の長い女性が立っている。僕は近づき「スキーは滑らないんですか」と聞いた。女性はにこりと笑い、私のわきの下に手を伸ばす。そしてぎゅっと抱きついてきた。僕もぎゅっと抱擁する。スキーウェアの上に確かに女性の体の骨格を感じる。彼女が顔を僕に向ける。僕はそのままキスをした。驚くくらい、唇の感触がリアルに伝わってきた。

目が覚めた。時計をみると午前五時七分。やった。キスは、本物のキスと同じ感触を味わえるぞ！ 多少気味が悪いと思っていたこの夢だが、彼女ができない僕にとっては願ってもないことだ。こんな夢をみれるなんてラッキーじゃないか！

それ以来、僕は次にこの夢が訪れるのが楽しみになった。

僕の部署に今日から研修生として、一週間一緒に働く女の子がやってきた。当社では入社一年目の社員は横とのコミュニケーションや、他部署でのやり方を学び今後の仕事に活かしてもらうために他県の支社へ研修に行くことになっているのだ。もちろん自分の支社にも毎年新入社員が二三名入って来るのだが、他所から来た当社の社員というのは何故か輝いて見える。そしてまだ変に擦れておらず、仕事への情熱、向上心のある瞳をみるとこちらも何だかやる気が出てくる。

今回やってきた結城支社の女の子は一見すると小学生ではないかと思うくらい小さく、幼く見える。その小ささをカバーするかのよう、大きな瞳と大きな声で僕たち先輩社員に物怖じせず何でも言いたい事を言う子だった。

リーダーシップがあるかもしれない。今後も期待できる人材だ。職場の皆からも受けが良く、研修が終了する最終日には珍しくお別れ会を開いた。僕が知る限り、一週間研修生でお別れ会をしたのは彼女だけだ。

結局僕はほとんど会話することはなかったけれど、「先輩の持ってるボールペンって、クロスですよ！」と話しかけられたことは強く印象に残っている。ああ、そう。クロスっていうんだこのボールペン。確かにクリップのところにアルファベットで書いてるね。でも僕は知らなかったんだ。だって社会人になる時、親が仕事ではこういうボールペンを使うもんだってお祝いでくれたものだから。別に僕の趣味じゃないんだよ。そう、ながながと返す言葉を考えているうちに、彼女は違う同僚に何か明るく話しかけていた。結局、「あっ」と発するのがやっとで、きっとその言葉は彼女に届かなかったはずだ。

広い部屋だ。十二畳くらいの畳の部屋。そう、旅館の一室に思える。一人の女性が部屋の中心に座って俯いている。部屋の電灯の真下、なんとなく上に眩しい光を感じた。部屋の奥の右手隅には三角座りをする女性もいる。ふたり一緒に出てくるのは初めてだ。

清楚な雰囲気を感じた真ん中に座る女性の傍に行き、肩に手をかけた。「どうしたんですか。僕が何か手伝うことができますか」。彼女は顔を上げるとありがとうと言った。とても素敵な笑顔だった。その時僕の右腕が掴まれた。部屋の隅にいた女性が、顔を俯けたまま僕の腕にすがりついてきたのだ。「おねがい、傍にいて。放さないで」と甲高い声で哀願する。「ええ、僕はど

こにも行きませんよ」。夢だから、覚めるけれども。その言葉を飲み込み、僕はなんだか訳がありそうなふたりの女性に、できるだけ優しくしてあげようと思った。

目が覚めた。時計をみると午前五時四分。今日はふたりいたためか、特によこしまな気持ちは起きなかった。けど、ふたりの女性にすがられるっていうのは……自分の人生では絶対にありえないことだ。僕は少し、にんまりとしてしまった。

忘年会のシーズンがやってきた。今年は幹事を任せ、店の予約や余興の企画などをほとんど僕一人でやることになった。幹事が僕になったのを知った課長は、僕を呼びつけた。

「今度の忘年会にはさ。サプライズで森宮支社に行った鈴山を呼んでくれないか。お前がこの支社に来る時、入れ代わりで転勤になったまあ、うちのチームの馴染みなんだけど、多分今年うちの忘年会の日には長期休暇をとって実家に、ああ、鈴山の実家はこっちの方なんだけど戻ってると思うんだよね。去年もそんな話してなんで呼んでくれなかったんだって言われたし。鈴山を呼べば皆も懐かしくて喜ぶだろうしね。メールアドレス送っとくから、ちょっと呼びかけといてくれな」

鈴山さんの話は僕がこの支社に来た時に何度か聞いたことがあった。結構仕事ができる人でユーモアもあり人気者だったようだ。その人柄が評価され、こちらの支社よりも対外的な取引が多い森宮支社に異動になったとか。でもそれくらいで僕は特に詳しい話も知らない。メールを送るととても喜んでいて。忘年会の日には実家に帰っているの都合はつけられる。久しぶりにみんなに会えるのが楽しみだ、とメールには書いていた。

電話がなった。暗い狭い事務室だった。あれ、誰もいない。女の子はいないのか？僕はちょっとがっかりしながら電話をとる。

「もう少しだけ、ここにいたい」

鼓膜に響くというよりは、脳に直接響くような高い女性の声だった。心臓を掴まれるような感覚があり、心臓の鼓動が早まるのを感じた。

目が覚めた。時計をみると午前五時五分だった。ちょっと汗をかいている。胸がどきどきしている。まだ耳に女性の声が残っている。不思議な感覚だった。まあ、こういうパターンもあるのか。

忘年会は僕の実力とは関係なく、無事に盛り上がってくれた。うちの部署はチームとしては仲がいい方だと思うので、結局場さえ整えようまくいくのだろう。余興のビンゴゲームも終わり、後は締めの挨拶を課長にお願いするだけ、という段になり、ようやく僕はゆっくり食事を摂ることができるようになった。すると顔を赤くした鈴山さんが隣にやってきた。

「よお、幹事ごくろうさん。聞いたぜ、俺が住んでたアパートに今いるんだって」

へ？ そんな話知らない。まあ、社宅として借りているアパートだから、前に誰かが住んでい

でもおかしくは無いんだけど。それが鈴山さんだったのは知らなかった。「たまに鈴山の泣かせた彼女が部屋に来ないか？」とやじる声が飛んできた。「来ません。静かなもんです」と僕はぼそっと応える。

「はあ、知りませんでした。そうだったんですね。って、鈴山さんは実家こっちの方だったんですよ。なんで社宅に入ってたんですか」

「ああ、実家はこっちの方だって言っても通うのに一時間かかるし。家出たかったし。やっぱ仕事は歩いて五分が理想だからね。社宅に入らせてもらってたんだよ」

なるほど、そういうこともあるかも知れない。

「ところでさ。今の部屋でときどき金縛りにあうことないか？」

鈴山さんがどきっとすることを言った。

「え、別にそんなことないですよ」

と僕が言いかえすと、「捨てた彼女の怨念が鈴山に襲い掛かってたんだよ」とやじがとんできた。「うるさいよ！」と鈴山さんが返す。

「そうかあ。俺も幽霊とかそういうの良く分からないほうだから気にしないようにしてたんだけど。もし君が同じように金縛りにあっていたら、本当に心霊物件だったかも知れないって思ってたさあ」

金縛りには遭いませんが、女の子が夢にやってきます。僕はそう答えようかとも思ったけれど、この話を説明するのは疲れそうなのでやめた。

「あいにく僕も靈感ゼロの人間ですから。ちなみに今の部屋では金縛りにあわないんですか？」

「あわないよお。ちょっぴり淋しいくらいにね」

淋しい？ そういうものなのかなあ。あわないに越したことはないと思うけど。

その日の帰り道、僕が午前五時の夢を見るようになったのは、確かに今の部屋に引っ越してからかもしれないと思った。

昼間の公園、水面にきらきらと光が反射している。僕はそこにいる人物を見て、思わず「あっ」と声をあげた。結城支社から研修に来てた女の子だ。彼女は湖に駆ける。僕はそれを追いかけて、腕を掴んだ。そしてそのまま強く抱きしめた。「会いたかった。夢でいいから会いたかったんだ。本当はもっと話がしたかった」。言葉が後から後から出てくる感覚、女の子を前にしてこんなに言葉が出てくるなんて初めてだった。夢だから？ いや、夢の中では誰でも寡黙ではないか？ 怒りをぶつける夢では悪口雑言を吐いたことがあるけれど、会話を交わすことなんてほとんどないと思う。「嬉しいです」。そうやって僕の胸に顔をうずめた。涙を流しているのが分かった。ああ、今日だけは、この夢だけは覚めないで、ずっとこのままでいさせて欲しい。

目が覚めた。午前五時六分だった。僕はまだ生々しく残る彼女の感触を布団の中で大事に大事に感じていた。そしてまたまどろんでいく消えてしまいそうな意識の中で、必死に思いだそうとした。

もしかしたら、僕は彼女が好きなのかも知れない。そしてああいう風に彼女が出てきたというのは、彼女も僕のことを思ってくれているのかもしれない。……いや、いくらなんでもそんなことはない。そう、それはただの僕の願望だ。そんなことを願うのはあまりにも痛すぎる。本当に気があるならばクロスボールペン以外にも何か話をしているはずだし、社内のメールでやりとりすることだって簡単にできる。結局、気なんてさらさらないから、まったく音沙汰もないわけで。僕だってはじめからそんな恋が実るとは思っていないから、声をかけようなんて思わないわけで。迷惑がられるだけだと思うから……。

けれども彼女の夢は他の夢とは違い、僕にとって特別な意味をもつ夢となった。また、もしもう一度夢で会えたら、好きと言おう。夢なんだから、思いっきり大声で言ってやろう。夢の中だけど、彼女は確かに言った。嬉しいです、と。きっと好きだといっても笑顔で返してくれるはずだ。

午前五時の夢。その後も時々訪れた。不思議とよこしまな気持ちになることはなく、出会う女の子にはいつも優しく対することを心がけた。なんだろう、僕にはそれで十分なんだ。それで十分なんだよ。

ゴールデンウィークが過ぎ、有給を足して長期休暇をとる同僚の我がままに会社が対応するため、結城支社から応援人員が配された。部長は申し訳なさそうにそのスタッフに頭を下げている。

相手が男だったこともあり、僕は彼女のことを聞いてみることにした。きっと元気いっぱい活躍しているだろう。ささやかな情報でいい。彼女のことを知りたい。

僕が話かけると彼は顔を曇らせた。え、まさか。

「会社を、やめた……とか。寿退社したとか？」

言葉を選んで彼の言葉が待ち切れずに僕は言った。彼は首をふった。はじめは小さく、そして大きく。それは何かを否定でもするかのよう。

「事故でね、亡くなったんだ」

嘘。

「本当に、残念だよ。あんなに素晴らしい子はなかなか入社してこない、いや、うちの会社なんてどうでもいい。人としてああいう子がこんなことになるなんて、ね。理不尽さに苛立つよ」

嘘。

「いつのことですか」

彼が語った日付は、あまりにも衝撃的だった。少しずつ思いだしていた。彼女が夢に出てきた日のこと。あれは何月だったか。ゴミの日だったから、何曜日だったはず。あの仕事の後だから何日頃だったな。そのおぼろげな記憶で導き出される日付は符合した。正しく言えば、彼女が亡くなった翌日の朝、僕は彼女に夢で会ったのだった。

了